

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26330370

研究課題名(和文) 文庫の読書記録にみる子どもの読書

研究課題名(英文) Analyzing children's reading activity according to lending records of Bunko

研究代表者

汐崎 順子 (Shiozaki, Junko)

慶應義塾大学・文学部(三田)・講師(非常勤)

研究者番号：50449021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：子どもの読書を実証的に明らかにすることを目的として、文庫の読書記録を中心に各種の記録の調査研究を行った。1965年から2005年までの約9万件の読書記録を入手してデータベースを構築し、1960年代後半から1970年代の12人の読みについて、分析を行った。ここでは本やシリーズの繰り返し読みのバリエーション、文庫でよく読まれた本の傾向などが分かった。訪問調査では文庫の活動内容の詳細、保存する記録類の存在を確認し、継続的、発展的な研究の必要性を示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to analyze children's reading activity empirically based on various records which stored in Bunko. About 90,000 children's lending records from 1965 to 2005 were acquired to create a database. According to this database, reading patterns of 12 children who used Bunko from the late 1960's through until the 1970's were analyzed. The result shows the variation of patterns reading the same book or a series of books over and over, the trend of books read frequently there at that time. A series of Bunko visits and a survey were conducted. The survey found many activities to introduce children to read, various records regarding children's reading at Bunko. The result shows continuous and evolutionary study of Bunko is needed and important to research children's reading activity.

研究分野：図書館情報学

キーワード：読書 子ども 文庫 児童図書館

1. 研究開始当初の背景

本と人との関わりを明らかにしようとする読書研究は数多くなされてきた。子どもの読書についても児童書の出版、読書推進活動、公立図書館の児童サービス等の状況を示す資料や文献は多数存在し、各時代における子どもの読書環境整備の様子を知ることができる。多くの公立図書館では資料の貸出回数から「ベストリーダー」を公表している。また毎年実施される「学校読書調査」は、各年における子どもの読書傾向を示している。

しかしこれらはどれも、一人一人の子どもの読書を実証的に読み解くものではない。子どもの読書は全体的な傾向、もしくは印象を中心にした主観的な観点から論じられてきた、といえる。

研究代表者は子どもの読書の内容を実証的な根拠に基づいて明らかにし得るものとして、文庫の活動と読書記録(貸出記録)を含む各種の記録に着目した。

文庫は子どもを対象とする私的な図書館活動である。1960年代以降、文庫は全国的な活動として広がった。現在も各地に多くの文庫が存在している。

これらの文庫の多くでは、子どもの読書記録(貸出記録)が保存・蓄積されてきた。それは各時代の子どもの読書の様子を伝える貴重な資料だが、通常は文庫関係者や子どもの思い出の記録として扱われ、公開されたり、研究対象となることはなかった。長い年月の経過の中で処分され、消滅してしまうことも多い。

しかし、児童文学者いぬいとみこが東京都練馬区に1965年に開いたムーシカ文庫の読書記録をはじめとする各種の活動記録が現存すること、研究対象として入手可能であることが判明した。ムーシカ文庫は1988年に活動を終えたが、その全蔵書を受け継いで1997年に栃木県益子町にまーしこ・むーしか文庫が誕生し、現在も活動を続けている。

今まで目を向けられなかったこれらの文庫の記録類、活動内容の研究は、子どもの読書を実証的に明らかにする有効な手段であり、発展的、継続的研究の可能性、その研究の成果が期待できる。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、文庫における子どもの読書記録(貸出記録)の整理、分析を通じて、子どもの読書の実態(成長段階に応じた読書能力の発達や読書興味の変化など)を明らかにすることである。

併せて日本独自の文化活動といわれる文庫の活動、文庫が保存、蓄積する各種資料の存在と研究価値を明らかにすることもめざす。

3. 研究の方法

本研究では大きく(1)文庫の読書記録(貸出記録)・蔵書記録等の整理と電子化、デー

タベースの作成、(2)文庫関係者への聞き取り調査、(3)類似の記録を持つ現役の文庫への訪問調査:各文庫の読書記録(貸出記録)、活動内容等の調査、という3点から研究を進めた。

(1) 文庫の読書記録(貸出記録)・蔵書記録等の整理と電子化、データベース作成
当初から入手可能であることが判明していたムーシカ文庫の各種記録を整理し、蔵書記録、読書記録(貸出記録)、会員記録の入力作業を行った。

なお初年度の訪問調査(平成27年1月)で、後継文庫のまーしこ・むーしか文庫が蔵書記録と読書記録(貸出記録)をムーシカ文庫と同様に作成し、それを保存していることが判明した。このため本研究のための利用について主宰者、関係者の諒解を得て記録を預かり、同様に入力作業を行った。

蔵書記録

初年度(平成26年度)にムーシカ文庫の全蔵書記録の3,465冊分の入力を行った。翌年度(平成27年度)には、まーしこ・むーしか文庫の1,075冊の蔵書記録を入力した。

読書記録(貸出記録)

初年度(平成26年度)はムーシカ文庫の貸出記録をもとに、入力内容と手順を定めた入力書を作成し、大半を業者に入力委託した(平成26年度~平成27年度)。

読書記録(貸出記録)については平成28年度に、新たに発見されたとして、追加分の提供があり、補助者による作業分と合わせて最終的な貸出記録の件数は90,318件となった(ムーシカ文庫:76,641件、まーしこ・むーしか文庫:13,677件)。

会員記録

個人情報に留意した上で、利用者である子どもの会員情報(年齢、性別、文庫の入会期間など)を入力した。こちら最終年度に追加情報の提供があり、全会員情報は1,334件となった(ムーシカ文庫:1,015件、まーしこ・むーしか文庫:319件)。

(2) 文庫関係者への聞き取り調査

文庫での読書の内容を質的に検証するために(文庫の活動内容、子どもの読書の状況、貸出の内容等に関する情報入手を目的とする)、ムーシカ文庫の当時の世話人(運営を手伝っていた者)、まーしこ・むーしか文庫の主宰者への聞き取り調査を実施した。

・ムーシカ文庫関係者:開設当初の世話人、木下惇子氏(仙台市、平成28年2月実施)。

・まーしこ・むーしか文庫関係者:主宰者石川綾子氏(文庫への訪問調査時:平成27年1月、平成27年7月実施)。

最終年度(平成28年7月)には、ムーシカ文庫の初期活動期である1960年代後半から1970年代に文庫を利用した子どもと、世話人を集め、座談会形式で聞き取り調査を行った(参加者29人)。この座談会に先立って、

入力したデータから各参加者の読書記録（貸出記録）を可能な限り抽出し、それを本人に手渡した。参加者にはその記憶を糸口に自身の子ども時代を思い出し、それぞれの読書経験、文庫の活動の様子などについての発言を求めた。

なお、音声記録は活字化してそれぞれの内容を検証した。

(3) 類似の記録を持つ現役の文庫への訪問調査：各文庫の読書記録（貸出記録）、活動内容等の調査

現在文庫では子どもの読書についてどのような働きかけを行っているのか、読書記録（貸出記録）等の保存、蓄積の現状と目的、どのような取り組みをしているのか等をより広い視点から検証するために、類似の読書記録（貸出記録）を持つ文庫、顕著な活動をしている以下の現役6文庫への訪問調査を実施した。

まーしこ・むーしか文庫

（栃木県益子町，平成27年1，3月訪問）

ちいさいおうち

（岩手県陸前高田市，平成26年8月訪問）

白河柿の木文庫

（福島県白河市，平成26年12月訪問）

クローバー子供図書館

（福島県郡山市，平成27年3月訪問）

まつお文庫

（宮城県仙台市，平成28年2，5，12月訪問）

荒井さくらんぼ文庫

（宮城県仙台市，平成28年5，12月訪問）

4. 研究成果

(1) 文庫の読書記録（貸出記録）・蔵書記録等の整理と電子化，データベース作成

一連の作業により、研究期間内に同じ蔵書構成を核として持つ2つの文庫の読書記録（貸出記録）をそれぞれ別々に、もしくは総合的に、多角的な検証が可能なデータベースを構築した。

このデータベース中のムーシカ文庫の記録をもとに、平成27年度にはムーシカ文庫開設初期の1965年から1970年代に5年以上の部の利用歴がある男女12人（男6，女6）を選び、その内容を検討した。

検討の結果のうち、主たるものを示す。

「繰り返し読み」のパターン

「繰り返し読み」（同じ本を繰り返し読む（借りる））については個人差がみられた。対象者全員に2回以上の貸出記録があったが、「ほとんど1回しか借りない（滅多に2回以上は借りない）」子どもと、「何度も繰り返し借りる」子どもの数はそれぞれ半数ずつという結果だった。男女で見ると女子の方が「繰り返し読み」の傾向が強かったが、対象とした人数が少ないため「女子の方が同じ本を繰り返し読む」とは言い切れない。しかし同じ

本を12回借りた女子の貸出記録が目をついた。

同じ本を4回以上借りた記録がある7人のパターンを調べたところ、a. 短期間に何度も読む、b. 長いスパンで再読する、という2通りの読み方があった。同じ本をある特定の年齢の時にだけ読む、という読み方だけでなく毎年読む、好きな作品を年齢が上がってから再読するという読み方もあることが考えられる。

「シリーズ本」の読み方

次に特定のシリーズの読みのパターンを検討した。シリーズとしての貸出数が多かったのは調査対象にした1960年代後半から1970年代に出版され、今も読み継がれている、岩波書店の翻訳作品群だった。

シリーズをどのように読んでいたかについては、a. 「長期読破型、混在読み」…同一シリーズの全巻を次々と読み進めるのではなく、何冊か読んだ後、他の本も借りて間をあけ、その後シリーズの何冊かをまた借りる読み方、b. 「短期読破型+シリーズ繰り返し読み」…同一シリーズの全巻を約4か月間に一気に借り、1年後に全巻を再度借りる、いわば「繰り返し読み」をシリーズ全体で行う読み方、c. 「短期読破型+複数シリーズ並行読み」…複数のシリーズを並行して読む、シリーズ単位で本を選び、間をあけずに読むタイプ、d. 「短期読破型+一点集中読み」…同一シリーズの5冊を1か月で一気に借り、その間他の本は一切借りない読み方、という4つの特徴的なパターンを見出した。

全体的な傾向

対象とした12人の貸出データを統合したところ、貸出総数は836冊、1冊の最多貸出数は18回だった。この結果には「繰り返し読み」が最も顕著だった女子の貸出回数（12回）が大きな影響を与えていたのは明確だが、貸出回数が上位の本についてみると、他の11人もかなりの割合で借りていることも分かった。

これら上位の本の多くは、現在も入手できる本、図書館の児童コーナーで定番といわれる作品だった。蔵書記録をみると、ムーシカ文庫では絵本も多く所蔵していたが、貸出の上位に絵本のタイトルは登場せず、小学中学年以上向けの児童文学作品が主だった。小学1年から中学3年までの子どもの貸出記録が分析対象であったことから、当時のムーシカ文庫の利用者は、小学校低学年の時から高い読書能力を持ち、内容が難しい物語、児童文学作品を選んでいたことが推察される。

この研究成果については、「文庫の読書記録にみる子どもの読書の実態」としてまとめ、2015年10月に日本図書館情報学会研究大会で発表した。さらにその内容を精査し、情報を追加して、2017年3月に雑誌論文を発表（同タイトル）した。またこの分析結果を核に『現代日本子ども読書史図鑑』（2017年刊行予定）に、「読書記録にみる1960～1980年

代の子どもの読書”を執筆した。

当初、調査研究の対象はムーシカ文庫という過去に活動をした(すでに活動を終わっている)文庫の読書記録(貸出記録)だったが、研究を進める中、現在活動をしているまーしこ・むーしか文庫、荒井さくらんぼ文庫の読書記録(貸出記録)の存在を確認し、入手することができた。

このうちまーしこ・むーしか文庫のデータ(入手は平成 27 年度分まで)との最終的な統合は研究の最終年度(平成 28 年度)となった。このためデータベースを総合的に分析するには至らなかった。しかし本研究では最終的に9万件を超える大規模な子どもの読書記録(貸出記録)に基づく実証的データベースを構築することができた。

加えて、主宰者の理解と協力により、これら2文庫のデータが、今後も入手できる見通しとなった。これらより本研究で作成したデータベースをもとに、過去、現在、将来にわたって、子どもの読書の内容を検証できる実証的なデータベースの構築が可能となった。

今回研究成果として示したのは、主として1960年代～1970年代の子どもの読書記録(貸出記録)の分析だったが、より多面的、総合的な視野に立った研究、各時代に即した変化などの研究をすすめて、その成果を示していくことが今後の課題である。

(2) 文庫関係者への聞き取り調査

木下氏への聞き取り調査では、ムーシカ文庫の主宰者だったいぬいとみこが、子どもの成長に見合った本を慎重に選び蔵書に加えていたこと、世話人を含め、子どもの本をよく知っている大人が子どもの身近にいて、これらの本を手渡していたことが明らかになった。

いぬいは編集者、児童文学の作家という立場から、文庫で「子どもの読書」を実際に確かめ、「よい子どもの本とは何か」、「作者、編集者としてどういう本を作り、子どもに手渡すべきか」ということを考えていたことも分かった。実際いぬいは、一人一人の読書記録(貸出記録)をまとめて、各自の「読書の歴史」として紹介したり、「文庫で人気のある本」を調べ、ジャンル別に推薦ブックリスト作成している。

これらより文庫での子どもの読書(成長段階に応じた読書能力の発達や読書興味の変化等)については、蔵書を選び、積極的に働きかけをする大人(主宰者や世話人)の役割が大きいことが明らかとなった。

現在活動中のまーしこ・むーしか文庫は、ムーシカ文庫に比べて利用者数は少ないが、主宰者は、ムーシカ文庫が所蔵していた本を大切に維持し、同様な形で子どもに手渡そうと考えていることが分かった。まーしこ・むーしか文庫の読書記録(貸出記録)の分析は部分的なものにとどまるが、ムーシカ文庫の利用者と同様のパターンで本を借りる子ど

もがいることを確認した。

文庫利用者による座談会では、最初は各参加者に、子ども時代にそれぞれの興味に応じて自由に本を選んでいて、と考えている様子が見受けられた。しかし話し合いの中では、複数の参加者に、自分の本の選択には、それを手渡そうとする大人(主宰者や世話人)の役割、同時期に文庫を利用していた仲間の影響、といった文庫内に形成されていた人的環境、つまり、人と人との関係もあった、という新たな気づきが見られた。

なぜ、どうして特定の本を選ぶのか、どのようにその本を読むのかについては、読書記録(貸出記録)の分析だけでは不十分である。座談会の参加者を1960年代後半から1970年代の文庫利用者としたのは、(1)で示した実証的なデータに基づく分析の内容を、質的な側面から再度検証するためでもある。

(3) 類似の記録を持つ現役の文庫への訪問調査：各文庫の読書記録(貸出記録)、活動内容等の調査

研究期間内に訪問した文庫の調査によって得られた成果を以下に示す。

まーしこ・むーしか文庫

すでに述べたようにまーしこ・むーしか文庫は、ムーシカ文庫の後継文庫である。

訪問調査では、文庫の主宰者である石川綾子氏が、単にムーシカ文庫の蔵書を受け継いだだけでなく、主宰者(いぬい)をはじめとする関係者の文庫運営の取り組みを重視し、継承しようとしていることが明らかとなった。

読書記録(貸出記録)、蔵書記録が継続する形で保存、蓄積されていたこと、その情報の利用についての許諾を受けたことにより、文庫の読書記録(貸出記録)の研究が過去から、現在、未来へとつながった。

いまだに町立図書館が存在しない益子町で、まーしこ・むーしか文庫が、町の子どもの読書環境に与える影響は大きい。開庫日には、遠くから車で子どもを連れてくる親も多いという。今後の活動、文庫における子どもの読書内容も注目される。

ちいさいおうち

東日本大震災で図書館も壊滅的な被害を受けた陸前高田市では、震災直後に3つの私立図書館が誕生した。ちいさいおうちは平成23年11月に設立された私立児童図書館である。仮設の陸前高田市立図書館に隣接する配置で、市立図書館は主として一般、成人へのサービスを、ちいさいおうちは児童サービスをとり、双方が役割分担して、市民に図書館サービスを提供している。

ちいさいおうちの設立と運営の中心は盛岡のNPO法人うれし野子ども図書室と、公益財団法人東京子ども図書館であり、両者は文庫を根に持つ。ちいさいおうちも、一種の文庫であると考えられることができる。

訪問の主たる目的は、未曾有の自然災害、

という特殊な状況下に生まれたちいさいおうちの活動内容を確認すること、「私」と「公」の協力の形を明らかにすることであった。

ちいさいおうちは市の図書館として機能しつつ、活動内容は文庫そのものであり、読書記録（貸出記録）も存在していた。このユニークな文庫活動の詳細については、“東日本大震災後の陸前高田市における図書館活動；現状と展望”としてまとめ、『図書館は市民と本・情報をむすぶ』中に発表した。

白河柿の木文庫

白河柿の木文庫は東京都大田区の「柿の木文庫」の蔵書を引き継ぎ、1998年に誕生した。前身の柿の木文庫の主宰者、岸田節子氏は、石井桃子のかつら文庫の初代お姉さんである（かつら文庫は後に東京子ども図書館の母体となった）。主宰者の石村宮子氏は石井の精神を継承し、かつら文庫に匹敵するような文庫活動を地方で実現することをめざしている。白河柿の木文庫でも、読書記録（貸出記録）の蓄積と保存の様子が見られた。貸出方法は、柿の木文庫のそれを継承しているが、さらにその根はかつら文庫にあるという。

調査では、石井のかつら文庫の蔵書の一部が、柿の木文庫を経由して白河柿の木文庫に所蔵されていることも判明した。

クローバー子供図書館

クローバー子供図書館は、1952年に家庭文庫として誕生した。現在も公益財団法人金森和心会（旧：郡山精神病院）の一組織として存続している。

クローバー子供図書館では、創設者の故金森好子氏の方針により、開館当初から1998年まで子どもの読書記録（貸出記録）を取り、保存していた。現在1万人を超える読書記録（貸出記録）が倉庫に保管されている。

本研究の申請段階では、この膨大な読書記録（貸出記録）について調査可能であり、ムシカ文庫の記録とともに、可能な限り電子化する予定だった。

訪問調査は読書記録（貸出記録）の全体像（分量と内容）の確認と、調査の方針を決めることを目的としたが、母体である金森信和会の意向により、研究のための利用が不可となった。これは、読書記録（貸出記録）を病院のカルテと同様の個人記録として扱う、という判断によるものであった。

クローバー子供図書館の読書記録（貸出記録）は、現存する最大級の資料であることは明白であり、その価値について繰り返し説明したが、病院側の判断を覆すことができなかった。

まつお文庫

まつお文庫は1977年、宮城県仙台市に松尾福子氏が自宅に開いた文庫である。設立時期には、仙台市の各地で文庫の活動が盛んに行われていた。松尾氏は仙台市内での2度の移転を経て、おおむね40年にわたり活動を続けている。

個人的な活動として長年続けている家庭

文庫の活動内容、読書記録（貸出記録）の調査が訪問調査の主たる目的であった。

まつお文庫では、個々の読書記録は年度ごとに子どもに返却しているため、実証的なデータとしての読書記録（貸出記録）は、入手できないことが分かった。しかし創設以来毎年発行している『文集』からは、各時期における活動内容、子どもの読書の様子、その変化などを知ることができる。また聞き取り調査からは、主宰者の一貫した考えに基づいた運営のもと、継続した子どもの利用、世代による変化の様子を知ることが可能と考えた。

限られた地域、かつ個人的な活動であるにもかかわらず、松尾氏自身の活動意欲、文庫の利用者、他の文庫運営者とのつながりなどにより、全国各地の文庫関係者、子どもの本関係者とのネットワークが生まれていた。

松尾氏は仙台の各文庫をつなぐ文庫連絡会「仙台手をつなぐ文庫の会」で中心的な役割も果たした。いわば文庫のキーパーソンといえる。その文庫活動に触発されて、文庫を始める者も多い。第6の訪問先である荒井さくらんぼ文庫の実井もその一人である。

荒井さくらんぼ文庫

荒井さくらんぼ文庫は、本研究開始時には誕生していなかった新しい文庫である。まつお文庫への訪問調査の際、松尾氏から紹介され、訪問調査の対象に加えた。

主宰者の実井美知江氏は、まつお文庫の活動に影響を受け、2015年12月に震災後にできた新興住宅地域に家庭文庫を開いた。

実井氏は、小さな子どもを持つ若い母親であり、文庫の利用者も実井氏と同じ世代の、乳幼児を連れた母親が多い。周辺には次々と新しい家が建ち、近隣の小学校に通う生徒数が多く、増加の傾向にある。

この荒井さくらんぼ文庫からは、創設以来の子どもの読書記録（貸出記録）と、全蔵書記録の提供と調査への協力について諒解を得た。平成28年度には、約2,000冊の蔵書記録を預かり、入力を完了した。

読書記録（貸出記録）については、当方の意向を反映した内容となるように、記入用紙の形式を修正してもらった。

訪問調査を実施した各文庫の活動、文庫で蓄積、保存している読書記録（貸出記録）の意義と役割について、平成28年11月に、講演会“「つなぐ」、「つながる」文庫の力：文庫活動の歴史と現状”で口頭発表を行った。併せて『2017年の図書館：2017年版』（2017年刊行予定）に、“文庫の活動と子どもの読書環境の変化”を執筆し、これらの文庫の活動の内容を紹介し、現代における文庫の役割、存在意義などを示した。

(4) 今後の課題と展望

子どもの読書、子どもの本の読み方は多様である。本研究期間中には部分的に子どもの読みの特徴やパターンを示すにとどまった

が、文庫の読書記録（貸出記録）が「子どもの読書」を実証的に明らかにし得る重要な資料であることを示した。

この読書記録（貸出記録）をもとに構築したデータベースからは、子どもの読書について、さまざまな分析と検証が可能である。

子どもの読書の背景にはさまざまな要素が存在する。児童書の出版を含む社会的、文化的状況、文庫と図書館、といった子どもに本を提供する「場」の違いも各時代に生きる子どもの読書に影響を与えている。

各文庫への訪問調査では、各文庫に読書記録を含む貴重な記録が蓄積、保存されていることを、それぞれの活動内容とともに確認した。子どもの読書を読み解くために、継続的、発展的な文庫の研究が重要かつ必要である。

今回の研究をもとに、各時代の子どもの読みのパターンを解明して一般化できる要素を見出すこと、過去および現在の「子どもの読書」にある共通点、相違点を示す研究をめざす。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

汐崎順子. 子どもの読書記録から「子どもの読書」を読み解く, こどもの図書館, 査読無. 2017, vol.64, no.3, p.10-14

〔学会発表〕(計2件)

汐崎順子. 「つなぐ」, 「つながる」文庫の力: 文庫活動の歴史と現状. 第70回読書週間記念「仲間と読んだ話したあの一冊: 昭和から今につながる読書のコミュニティ」講演会, 2016年11月3日, 千代田区立千代田図書館(東京都・千代田区)

汐崎順子. 文庫の読書記録にみる子どもの読書の実態. 第63回日本図書館情報学会研究大会, 2015年10月17日, 学習院女子大学(東京都・新宿区)

〔図書〕(計3件)

佐藤宗子[ほか]編著. 柊風舎, 現代日本子ども読書史図鑑. 2017刊行予定, (汐崎順子. “文庫の読書記録にみる1960~1980年代の子どもの読書”)(編集中)

児童図書館研究会編. 日本図書館協会, 年報こどもの図書館: 2017年版. 2017刊行予定, (汐崎順子. “文庫の活動と子どもの読書環境の変化”)(編集中)

池谷のぞみ, 安形麻理, 須賀千絵編著. 勁草書房, 図書館は市民と本・情報をむすぶ. 2015, 363p. (汐崎順子. “東日本大震災後の陸前高田における図書館活動: 現状と展望” 執筆箇所: p.332-342)

6. 研究組織

(1)研究代表者

汐崎順子 (SHIOZAKI, Junko)
慶應義塾大学・文学部・講師(非常勤)
研究者番号: 50449021

(2)連携研究者

石田栄美 (ISHITA, Emi)
九州大学・附属図書館・准教授
研究者番号: 50364815